

# バングラデシュにおける生活の諸側面と女性の活動

藤田 雅子

## Some Aspects of Daily Living and Women's Activities in Bangladesh

Masako Fujita

Bangladesh is one of Least among Less Developed Countries classified by the United Nations where administrative and political activities do not always reach all the people, and where GNP per papita is less than one hundredth of Japan.

The purpose of this report about Bangladesh is to study the activities by women. Only four out of five can survive until age of five. Teen age mothers are not rare. If they have a chance of receiving primary education and can read and write, there will be a hope that they will be able to protect their own health as well as next generation from death.

Women's activities are limited by the religious and traditional norm called "purdah". The secondary enrolment ratio for girls is 11%, and the adult literacy rate for female is 19%, both less than a half of men. There are few opportunities for women to participate in economic activities. If the husband dies or if she is divorced, it is not easy thing to bring up children by her own.

Backed by the United Nations organizations and international assistance, the Government and non-governmental organizations are striving to yield some results, despite the existinng "purdah" and the class system.

The Bangladesh Women's Association with its 280 branch offices sets vocational training, literay education, and health education including family planning as three main areas of their activities. They also work for child care and nutritional suupplement. There is a NGO which has been assisting the programme for families of mother and children, and orphans, whithout receiving any support from Government since 1977, providing a chance of econmic self-reliance for mothers, and education and nutrition for children.

In order to prevent too many pregnancies and too many deaths of children as well as population explosion, family planning is one of the challenges the developing countries have to tackle, which will only become possible by the activities of field workers who visit every house in the slum under the blazing sun.

Although over 80% of the population live in the rural area, this country has to

supplement chronic calorie deficiency with food assistance from overseas. Rural women have more restrictions than urban women and their agricultural work are not regarded as the participation in economic activities. It is customary for housewives to eat last in the family, which often lead pregnant women to nutritional deficiency.

Assisted by such foreign countries as Japan, cultivating and income generating farming is now underway and the agriculture training together with literacy education for women also started.

This kind of programme is not usually big enough to cover the whole country. However, the support strategy aiming at women, children and families will certainly bring the country prosperity. This will also help the country to get free from poverty and to protect itself from national disasters.

## I はじめに : 女性の地位と社会福祉の距離

女性が家庭内で病人の看護, 老人の介護, 障害者の世話, 育児などの機能を任されているうちは, 福祉は男女共通の機能つまり社会の機能とはみなされにくい. 逆に女性が解放され, 男女共存(あるいは男女平等に近い地位)が確立している国においては, 社会福祉が重要な社会的機能である.

女性と社会福祉との距離を測定するのが目的であるから, まずは福祉現場を見ればよいと考え方はいわゆる先進国の中でのみで通用し, 発展途上国, とくに後発開発途上国では無理である. 女性の地位にとって, 経済的尺度, 政治的安定度, そして宗教(様々な宗教)の浸透度が重要な尺度で, 福祉(社会福祉)との距離を直線的に測定するのはむずかしい. 様々な要因が複雑に関連し合っその社会を構成しているからである.

社会福祉的活動は, 人道的立場から障害者福祉などピンポイントほどの実践が行われている場合はあるが, むしろ生活の質の向上につながる活動を福祉的活動ととらえ, そこにおける女性の活動を知ることの方が先決であると考え. ある程度女性が解放され, 地域活動に参加し, 「家」から離れる事態が生じなければ福祉の必要性は痛感されない. したがって

特に後発開発途上国の場合, 女性の行動を追跡しなければ, 社会の状況を大局的に把握することができないと考える. 後発開発途上国に共通の側面もあるが, その国の独自性もあるので, 一般論で論ずるのはなく, 特定の国に出かけ女性の状況を見る意外に方法はない. 後発開発途上国に関しては日本国内で資料を入手することはほとんど不可能である.

そこで日本とはなるべく多くの対照的な特徴をもつ国としてバングラデシュを選んで, この仮説を前提として女性の活動を多面的に把握する試みをした. ただし共通項として人口が日本と同程度で, 情報収集のために第一外国語が英語の国で, 次のような特徴を満たすからである.

- 1 日本は中流意識をもつ人が大半を占めるが, 中流層がほとんどいない国.
- 2 日本は宗教的影響は大きくないが, 生活に宗教が浸透している国.
- 3 日本は一人当たりのGNPは日本は世界で最も高いが, 最も低い国.
- 4 日本は高齢社会を迎えるが, 15歳以下の人口が増加している国.

## II バングラデシュの生活諸側面と女性

⇒【】数字は, IIIのまとめの部分と対応している.

### 1. 経済指標と貧困ライン

- ① LICs低所得国の中のLLDC後発開発途上

国「バングラデシュ」

：国民1人当たりのGNPは170ドル  
バングラデシュはDAC (Development Assistance Committee) 開発援助委員会の分類によると、LICs (Low-Income Countries) 低所得国のグループに入り、1人当たりのGNPが700ドル未満の国である。

さらに国連は、LLDC (Least among Less Developed Countries) 後発開発途上国という分類を使用しているが、開発途上国の中でも特に開発が遅れた国々で、国連の開発計画委員会の作成した基準に基づき同委員会が審査した後、経済社会理事会を経て国連総会で承認する。90年7月現在41か国あり、LLDCはLICsの中に含まれるが、バングラデシュはLLDCのひとつである。⇒【1】

1988年の国民1人当たりのGNPは170ドルで、近隣のネパール、ブータンとともに世界の最貧国に属する。日本はHICs, High-Income Countries 25か国のひとつで、同じ1988年の国民1人当たりのGNPは21,020ドルで、計算上は日本はバングラデシュの123.6倍という値になる。

② LLDCにおける貧困の意味

：貧困ラインⅠと貧困ラインⅡ（絶対的貧困）

このような経済的数値を生活面から見ると、まず直接的に影響を受けるのが食生活である。表1はバングラデシュについて、貧困ライン以下の人口と比率を、都市部と農村部に分け

てそれぞれに表している。ひとりの人の1日の摂取カロリーから、貧困ラインⅠ（2,122カロリー以下）とさらに貧困ラインⅡ（1,805カロリー以下）の2種類に分類し、貧困ラインⅡは貧困ラインⅠに含まれ、特に「絶対的貧困」と呼んでいる。なお、貧困ラインⅠを示す2,122カロリーは、人間にとって最低必要な摂取カロリーである。⇒【13】

85～86年においても、農村部で4,420万人、都市部で700万人が貧困ラインⅠに属している。これは農村人口の51.0%、都市人口の56.0%に相当し、国民の半数以上が貧困ラインⅠに入るということを物語っている。しかもその中で、農村部に1,910万人、都市部に240万人の絶対貧困層を抱え、これは農村人口の22.0%、都市人口の19.0%に相当し、国民の1/5が絶対的貧困の状態に置かれていることになる。

しかし貧困ライン以下の人数も総人口に占める割合も改善されてきてはいる。貧困ラインⅠ以下の人々が農村で占める割合は、73～74年が82.9%、81～82年が73.8%、83～84年が57.0%そして、今見たように85～86年が51.0%と率が低下してきている。

労働力を吸収する工業などの産業に乏しいバングラデシュでは、圧倒的多数が農村に住み、土地なし農民も多いのであるから、農村部の栄養改善は国全体の摂取カロリーの底上げにつながるという期待ももてる。

以上の数字から、国民の2人にひとりが貧

表1 貧困ライン以下の人口と全人口に対するその比率

年	貧困ラインⅠ				貧困ラインⅡ			
	実数 (100万)		比率 全人口に対する比		実数 (100万)		比率 全人口に対する比	
	農村	都市	農村	都市	農村	都市	農村	都市
1973-74	57.4	5.6	82.9	81.4	30.7	2.0	44.3	28.6
1981-82	60.9	6.4	73.8	66.0	43.1	3.0	52.2	30.7
1983-84	47.0	7.1	57.0	66.0	31.3	3.8	38.0	35.0
1985-86	44.2	7.0	51.0	56.0	19.1	2.4	22.0	19.0

貧困ラインⅠは、1人の1日のカロリー摂取量が2,122以下を示す

貧困ラインⅡは、1人の1日のカロリー摂取量が1,805以下を示す

(出典 Bangladesh Household Expenditure Survey, 1985-86, BBS)

困ライン以下で、5人にひとりが絶対的貧困にあるのがバングラデシュの現状であるといえる。「飢える」というを体験的に実感した記憶のある世代が少数派になった日本において、バングラデシュの貧困ラインが語る数字を共感的に理解することすら難しいかも知れないが、この現状は認識しておかなければならない。南北の格差を端的に示す数値であるからだ。

—写真説明—

農村では、育てる農業、収入になる農業が必要である(写真1参照)。

## 2. 一般的な低賃金と女性の労働への参加の制限

：地域による賃金格差と児童も労働者としての位置付け

バングラデシュの人は働いた報酬として、どれだけ賃金を手にすることができるだろうか。Labor Force Survey 1985-86 BBSの統計から、「10歳以上で所得のある者について性別、地域(都市部・農村部)別に見た賃金」を参考に傾向を把握してみよう。

10歳といえば、日本では小学校の中学年で、義務教育修了までにまだ5年を残し、労働力としては到底考えられないし、法律違反である。しかしバングラデシュではすでに労働力としてカウントされている。

都市部の週給平均が335.17Tk、農村部が週給平均が177.00Tk、全国平均の週給が208.14Tkになる。これも10歳以上の総人口の平均ではなく、収入のある人口の平均である。レートによる換算は必ずしも実感と一致するものではないが、あえて邦円に換算すると、全国平均の週給が900円程度であるから、月額賃金で4,000円弱という額になるであろう。しかも多くの人口が住む農村部の賃金は都市部(月額6,000円弱)の半額強といったところで、農村部の収入は月額に3,000円程度である。

しかも宗教的かつ伝統的規範であるパルダ

(Purdah)の下で、一般的に女性は自由に労働に参加することができない。⇒【6】したがって賃金を得る女性はごく一部であるが、この統計の全国平均によると、男性の週給平均が224.96Tkであるのに対して女性は124.89Tkと低い。男性の半数が週給平均199Tkと高くはないが、女性の半数の週給平均は99Tk以下で男性よりさらに低く半額程度で働いている。

Labor Force Survey (1985-86)によると、農業を含んで雇用されている労働者3,050万人であるが、そのうち女性は310万人という数字もある。一方、子どもはすでに重要な労働力として考えられ、すでに5歳から14歳の年齢で、労働力としてカウントされている子どもは全国で275.2万人に達しており、表向きの統計によると、全女性の労働者の人数に匹敵する数字である。児童の労働者のうち、都市部が26.9万人、農村部が248.3万人である。子どもの場合も労働力は圧倒的に男子で、275.2万人のうち女子は56.8万人だけである。これらの数字は漠然とした傾向を知るうえで役には立つが、信憑性はあまり高くはないと考えられる。実際はもっと多くの児童労働者が働き、家計を支えているものと推測できる。

—写真説明—

女性の経済活動の必要性に気づき、貧困層の女性に職業教育が開始されてはいる。

⇒【9】(写真2・写真3参照)

労働に参加する女性の職場は、男性とは別に隔離されているのが一般的である(写真4参照)。

児童の労働力は、バングラデシュの経済にとって欠かせない(写真5参照)。

バングラデシュにはマン(パワー)イクスポートという用語があり、国内に労働力を吸収するだけの産業がないので労働力の輸出は国の方針である。多くが同じイスラム教国で収入が得られる中近東で働いて本国に送金している。国内でも女性の行動は制限されてい

るので、いわゆる出稼ぎ労働者は男性である。日本にも中近東に比較すれば人数は微々たるものであるが、熟練労働者や留学生・就学生を除いて不法就労という形で働いている。日本で働けば、1か月でバングラデシュの30～50倍の賃金が得られる計算になる。

### 3. 男性社会と女性社会が平行する社会

#### ① 女子の就学率は低い

：女性は十代で結婚するのが一般的。バングラデシュがパキスタンから分離(1971年に独立)する以前は、1960年代には女性は13歳か14歳で結婚し、夫となる男性は22歳くらいというのが、平均的な結婚年齢であったようである。独立後に初婚年齢(女性の再婚は極端に難しい)はいくぶん上昇し、女性は1970年代に16歳代、1980年代には17歳代になっている。いずれも夫となる男性の年齢は24～25歳くらいである(Vital Registration Survey)。

#### ⇒【3】

日本流の表現をするなら、中学生か高校生くらいの年齢で女性が結婚するのが平均的であり、逆にバングラデシュ流に日本を表現をするなら、女性が30歳で独身でいること、「結婚しないかもしれない症候群」は信じ難い現象である。女に教育は無用論はバングラデシュでは現実に生きている。

先に引用した統計でも分かるが男子は10歳になると労働力としてカウントされるが、女性の労働参加は考えられないから、女子は子どもの頃は母親の家事を手伝い、10歳を越えたと母親になる準備をし始めるので、学校教育からドロップアウトしていくのは圧倒的に女子が多い。ユニセフ「世界子供白書1991」の教育統計によると、小学校の就学率は男子67%、女子44%である。しかし就学しても小学校を修了する児童は20%で、中学校進学率は男子24%、女子11%である。いずれも女子の低さが特徴的である。⇒【4】

女子は家庭の主婦となることが期待され、教育より家事や育児が重視される(写真6参照)。

女子の中学校進学率は11%で、男子の半分以下の率である(写真7参照)。

極貧の暮らしをする子どもを、教育の場に引き出すこと自体が難しい(写真8参照)。

成人の識字率は、男性45%、女性19%である。女性が育児、家事、労働の参加によって読み書きができることは重要であり、社会の進歩にも貢献するのだが……………。

⇒【10】(写真9参照)。

バングラデシュは、日本のように中流が大半ではなく、中流が抜け落ちた二重構造であるので、貧しい家庭の出身者はあくまでも貧しく、教育よりは収入の道を選択せざるをえないというのが一般的である。

しかしごく一握りの社会的地位の高い家庭の出身者は、初等教育の頃から一般的、平均的な教育とは異なるエリートコースを歩んで、大学教育まで到達する。バングラデシュには現在、総合大学は7校のみである。全体で41,255人が在籍するが、このうち21.6%の8,904人は女子学生である(87～88年)。名門ダッカ大学には14,167人が在籍し、このうち、28.7%の4,063人は女子である。科学部や商学部などはまだ女子は少ないが、社会科学部や文学部は女子は男子よりわずかに少ないくらいである。(Registrar of the University)

#### ② イスラム法による家族の規範と女性の行動

：異教徒には理解できなくとも、イスラム法は日常生活を律する

バングラデシュはイスラム教国家であるので(わずかにヒンズー教など他の宗教もある)、相続法・婚姻法・扶養法など民法関係はすべてイスラム法に基づいている。すなわち宗教によって女性そして妻の立場も決定されるわけで、コーラン(神の言葉を預言者マホメッドが人類に取り次いだもの)とハディース(マ

ホメッドの言語録)が日常生活を律して、人々はそれに従っている。例えば女性に関する規定をピックアップしてみよう。

1 夫が死亡した場合、妻の遺産相続権は1/8である。⇒【7】

残りを男子2に対して女子1の割合で均等に分割する。

2 子どもの親権・扶養権は父親がもつ。⇒【8】

女性は婚姻前は父親に、婚姻後は夫により扶養される権利をもっている。

3 一夫多妻が認められている。

異教徒が善し悪しの価値判断を下せないし、民主的ではないと口をはさむ余地もないのである。イスラム教徒にとってもコーランの内容は神の言葉であるから「なぜ」という疑問を投げかけることすら不可能である。

#### —写真説明—

女性は離婚した場合子どもの扶養義務は子どもの父親にあるが、夫が死亡(中年の男性の死亡率は先進国に比較にならないほど高い)した場合、特に貧困層の母子は、文字通り路面に迷うことにもなりかねない(写真10参照)。

さらに先に述べた伝統的規範「パルダ」を遵守し⇒【5】、外出は制限され、経済活動への制約はもちろん、むやみに敷地から外に出ない、買い物は男性の役割である、食事は家族で最後にとる、来客があっても妻は顔を出さないし共に食卓を囲まない、くるぶしから上をさらさない服装(通常はサリー)にする、など女性であるから従わなければならない伝統が多い。

原忠彦によると、パルダとは「不必要な性的興奮を両性に起こさせない為、成熟した男女が(特に女が)、近親者以外の異性に、肌(姿・顔)を見せないようにする制度」であるという。この制度の根本に「男と女が顔を合わせれば双方に性的欲望の起こるのは当然であり、結果として、不義姦通は勿論、親

なし子の扶養の問題が引き起こされて社会不安が生じる」という信条があるからだそうだ。

(ジュリスト増刊総合特集3、現代の女性—状況と展望「バングラ・デシュの女性—被扶養者として、債権者として」1976)

ただし、社会的に地位が高かったり、高等教育を受けているごく一部の女性は、仕事をもち、自由に外出し、食事も家族と食卓を囲み、客と談笑するが、彼女たちでも服装は伝統を崩さない。一般的にはこのパルダが厳しく守られている。

#### 4. 多産多死と妊産婦の死亡

##### ① 多産多死と高い乳幼児死亡率

：多産多死を食い止めるには乳幼児を死なせないことが先決だが

人口爆発寸前のバングラデシュではまだまだ子ども人口が増加の一途をたどっている。ユニセフ「世界子供白書1991」によると1989年に生まれた赤ちゃんは465.9万人である。人口1億1,250万のバングラデシュであるが、ほぼ同じ人口1億2,300万を抱える日本ではこの年の赤ちゃん誕生は134.1万人である。ところが5歳未満児の死亡はバングラデシュでは、年間85.7万人(日本は8,000人)になっている。

ところで出生1,000に対して、1歳未満児の死亡率は116、5歳未満児の死亡率は184人と、アジアではネパール、ブータンと並び最悪の数字を示している。生まれても1歳の誕生日を迎えられない赤ちゃんが10人に1人いるという数字である。死をまぬがれても、栄養不良のため中度または重度の発達障害が70%に達するという。(日本は1歳未満児死亡率4、5歳未満児死亡率8である)。⇒【2】

#### —写真説明—

表2は家族計画の記入用紙で、その表裏を表す。「生まれた子どもの人数」とともに「生存している子どもの人数」という記入箇所がある(写真11参照)。

わが子が病気になっても医療が受けられ



まり自分の子どもは大人になるのだという約束を親たちになさなければならない。先に述べたように経済的に苦しい国においては、子どもは重要な働き手であり、収入源であるから、親は生活が苦しければ苦しいほど、子どもを欲しがらる。

このような悪循環の中で、家族計画の最前線に立つのが家族計画フィールドワーカーである。現在（1988～89年）、バングラデシュ全国に家族計画フィールドワーカーは21,894人いるが、圧倒的に女性が多く全体の80%近くを占めていて、女性17,466人、男性4,388人である。（Directorate of Family Planning, Directorate of Population Control）

⇒【12】

50才以下の既婚女性を対象とした避妊調査がある（Bangladesh Fertility Survey 1975, Contraceptive Prevalence Survey 1985）。75年には7.7%（うち、ピル2.7%・禁欲1.1%・安全期1.0%）の避妊率が、83年には19.1%になり、85年には25.3%（うち卵管除去7.9%、ピル5.1%、安全期3.8%、コンドーム1.8%、精管除去1.5%、IUD1.4%、など）にまで避妊率が上昇してきている。

85年の結果を年齢別に見ると、14歳以下5.1%、15～19歳10.7%、20～24歳21.7%、25～29歳33.5%、30～34歳35.6%、35～39歳34.4%、40～44歳26.4%、45～49歳15.0%という結果が出ている。81年の結果と比較すると、どの年齢層も避妊率は上昇しているが、25～39歳では、特に避妊率が10%前後上昇している。

特殊合計出生率にも効果が現れ始め、1960年6.7、1980年6.4、そして1989年が5.3になってきている（世界子供白書1991）。

—写真説明—

国として家族計画が順調に軌道に乗るには、家族計画のフィールドワーカーの養成が先決である（写真13・写真14参照）。

## 5. 日々の生活管理は女性の仕事

### ① 摂取カロリー

経済的な厳しさがまともにも影響与えるのが食生活であるが、すでに述べたようにバングラデシュ全土には一日に2,122カロリー摂取できない貧困ライン以下の人が半数、その中に含まれる絶対的貧困、つまり一日に1,805カロリー摂取できない人は国民の5人に1人の割合になっている。

摂取カロリー以外で日々の生活状況を見たが、入手できる最も新しい資料で1981～82年（国勢調査の結果）である。傾向を把握する程度にとどまるだろうが、参考になるデータではある。現在はいくぶん改善されているかもしれない。

### ② 飲料水

人間の生活にとって飲料水は欠かせない。バングラデシュ全体としては、水道（ただし消毒などの処理はなされていない）3.6%、掘り抜き井戸（軟弱な地盤に鉄管を打ち込んだ井戸）53.1%、池37.5%、川5.8%という状況である。水道や井戸であっても各家庭にある方が珍しく、その大半が共同の水道や井戸であるので、そこまで水瓶をもって汲みに行って各家庭の台所に保存する。

上記の数字は全国平均であるが地位差が大きい。水道は都市部で26.2%・農村部0%、井戸は都市部54.1%・農村部51.0%、池は都市部17.4%・農村部40.7%・川は都市部2.3%・農村部8.3%である。都市部の80%が水道や井戸を利用してきて、残りの20%が池や川の水を使っているのに対して、農村部の50%が池や川の水を使用しなければならない状況にあることが分かる。

—写真説明—

日常生活にとって清潔な水の確保は欠かせない。水のある所には人々が集まる（写真15参照）。

### ③ 台所の燃料

食物の煮炊きにとって燃料は欠かせない。



バングラデシュ全体としては、多い順に見ていくと、麦藁・枯れ葉・牛糞71.75%と圧倒的に多く、次いで薪23.50%であり、これらではほとんどであるが、他に灯油1.87%、ガス1.40%、電気0.33%、トウモロコシなどの皮0.20%がある。

燃料に関しては地域格差が特に大きく、都市部では薪が多く50.43%、他に麦藁・枯れ葉・牛糞19.54%、灯油13.79%、ガス11.71%など様々な燃料が使われ、電気もわずかであるが1.62%となっている。農村部では麦藁・枯れ葉・牛糞78.61%と薪19.97%だけといていい状態で、他の燃料はほとんどない。

#### —写真説明—

農村部では、周囲で集められる燃料を煮炊きに使う。灯油やガスなどは考えられない(写真16参照)。

#### ④ トイレ

トイレの種類は全国を平均すると、下水設備のある水洗0.52%、腐敗タンク(バクテリアで下水を無害にする槽)のある水洗1.04%、下水設備のある便所1.04%、使用後に水で流すトイレ3.55%といわゆるトイレの範疇に入るものはわずかで、その他(穴をほっただけ)44.94%とトイレなし(野原や藪で用をたす)48.91%が圧倒的である。

農村部はトイレなし・その他の合計が98%以上になる。都市部になると、トイレなしが13.20%に下がる分だけトイレらしいトイレが増え、使用後に水で流すトイレ21.05%、下水設備のある便所8.11%、腐敗タンクのある水洗7.66%、下水設備のある水洗も3.64%普及している。

#### —写真説明—

トイレは文化のバロメーターとしての意味があるが……(写真17参照)。

### Ⅲ ま と め : 基本的福祉は女性、子ども、家族的に入れる

⇒【】の数字は、既述のⅡの部分と対応している。

まとめとして、読売新聞『論点』(1991年6月2日)に書いた「苦難のバングラに着実な国際支援」という文章を再度掲載する。

-----

バングラデシュから帰国直後、サイクロンのニュースを聞き、自分の力で生活の向上に努める友人たちの顔が目につかんだ。行政や政治も末端までは及ばず、国民一人当たりのGNPは日本の百分の一程度で、国連が指定する後発開発途上国のひとつである⇒【1】それなのに自然までが追い討ちをかけるのか。

バングラ訪問は女性と子どもの活動状況を知るのが目的であった。生を受けても5歳の誕生日を迎えられるのは5人のうち4人強⇒【2】。10代の母親はめずらしくない⇒【3】。せめて初等教育を受けて読み書きができるなら⇒【4】。母親自身の健康を守り、次代を担う世代を死から救える期待はある。パルダと呼ぶ宗教的、伝統的規範によって女性の行動は制約される⇒【5】。女子の中学校進学率が11%、成人女子の識字率が19%とともに男子の半分以下である⇒【4】【10】。都市部の学校は二交替制の授業、さらにその学校を成人の識字教育の場にする。

女性が経済活動に参加する機会は少ない⇒【6】。夫が死亡したり⇒【7】離婚したりしたら⇒【8】。母親だけの子育ては並大抵ではない。生活保護も母子寮もない。

パルダや階級制を残しながらも女性の自立を目指して、国連機関や海外の援助を受け行政や非政府機関(NGO)が頑張り、方向性のあるプログラムが成果を上げている。全国に280支部をもつバングラデシュ女性協会は職業教育、識字教育、健康教育(家族計画を含む)を三本柱に、幼児の保育と栄養補給を取入れている⇒【9】【10】。指導者の教育、訓練設備、体系的カリキュラムが不十分、訓練生に寄宿舎や交通費を提供できない、女性のための職業安定所や製品販売所を設置したい

など課題は山積している。識字教育は土間に  
ごさを敷き、採光の良くない教室にスジ詰め  
状態である。

母子家庭と孤児の保護と自立のためのプロ  
ジェクトを、政府の援助なしで77年から続け  
ているNGOもあり、母親には経済的自立を、  
子どもには教育と栄養を提供している。⇒【11】

多産多死を食い止め、人口爆発を防ぐため  
に、家族計画は発展途上国にとって解決すべ  
き課題のひとつである。炎天下、スラムを一  
軒ずつ回って指導する家族計画のフィールド  
ワーカーの活動があってこそ、可能になるの  
である⇒【12】。

国民の80%以上が農村に住むが、この国は  
慢性のカロリー不足を海外の食糧援助によっ  
て補っている⇒【13】。農村女性は都市以上  
に制約を受け、家内の農業労働は経済参加と  
しての評価を受けない。主婦は家族がすませ  
た後で食事をとる習慣なので、必要な栄養を  
摂取できない妊娠女性も少なくない⇒【14】。  
日本を含め海外からの応援を得て、育てる農  
業そして収入を得る農業の取組もなされ、さ  
らに女性に対して識字教育と平行した農業指  
導にも着手した⇒【15】。

この種のプログラムは全国をネットワーク  
で包むほどではない。しかし女性、子ども、  
そして家族を的に入れた援助戦略は、必ずや

その国に発展をもたらすだろう。貧困から脱  
出し、災害から身を守ることもつながる。

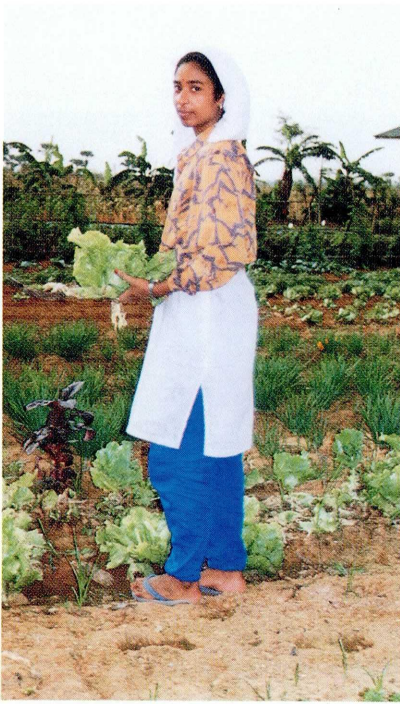
日本もすでに青年海外協力隊をはじめ、若  
い世代が、農業、漁業、医療などの領域で頑  
張っている。実年だって経験を生かして現地  
で貢献できるはずだ。しかし、そのためには  
一時休暇制度など、滞在中の経済的安定の対  
策が講じられなければならない。国家間の血  
の通った協力は善意だけでは無理である。

サイクロンの爪痕が、この細くとも貴重な  
頑張りを減速させたり、挫折させぬように祈  
るとともに、この史上まれに見る災害の社会  
的背景に注目し、政府開発援助（ODA）を含  
め国際協力を真剣に考え、実行する機とした  
い。

以上をまとめとしたい。ここでは全体的把  
握がじつに困難なバングラデシュについて、  
入手できた資料と現地での見聞を通して、な  
るべく客観的な状況の概略を把握するにとど  
めざるをえない。現地で調査した女性の自立  
への具体的なプロジェクトなどについては、  
紙面の都合もあり次回に報告する。

この報告のもとになっているバングラデシ  
ュ滞在は、1991年4月である。

なお、引用の資料等については本文中に書  
き入れた。



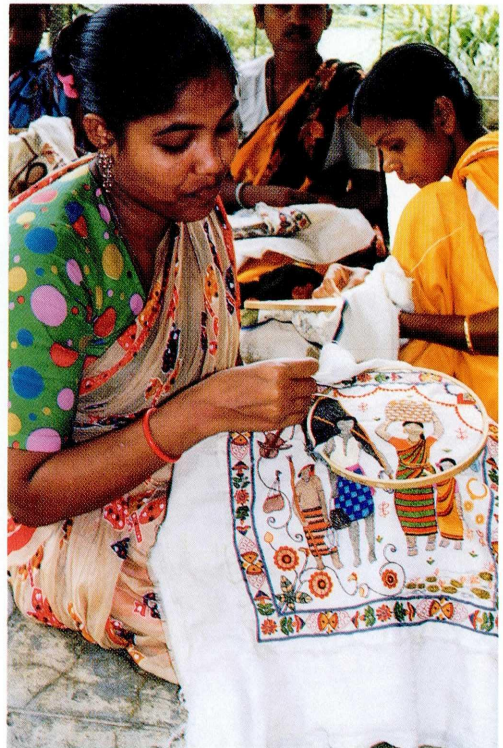
[写真 1] パルダを尊重し，農村女性専用の農業研修所（Savar）⇒【15】

[写真 3] 母親が指導を受けている間，子どもは保育と栄養補給．このようなサービスはまれである



[写真 2] 職業につくために機織りを学ぶ母親．職業訓練は伝統的な種目が大半である

[写真 4] 伝統刺繍を刺し，賃金を得る貧しい女性（Dhaka市内）





[写真5] 高級サリーを織る12歳は一人前の職人。彼は優れた能力の持ち主であるので、大人に混じって危険な仕事につくことはない (Jamdani)

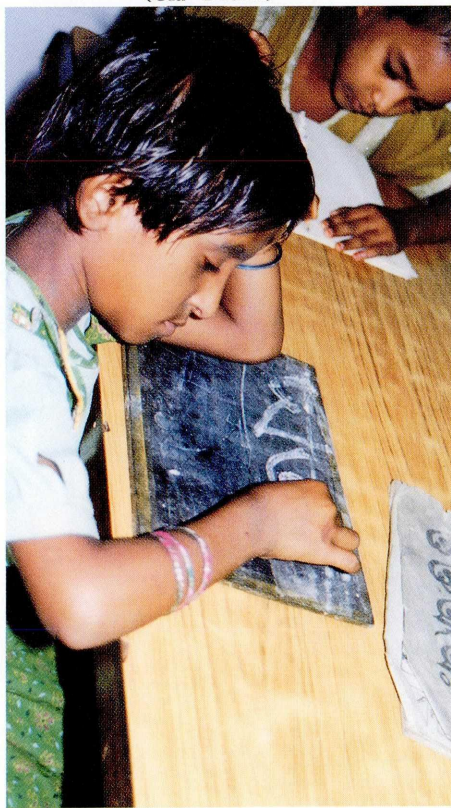
[写真6] 女の子は、弟妹の世話や家事などによく働く (Dhaka郊外)



[写真7] ダッカ市内の女子中学生。選ばれた出身階層であろう (Dhakaの中心地)



[写真8] スラム暮らしの子どもにベンガル文字を教える寺子屋式教室 (Old Dhaka)



[写真10] そんな母子のために母親には職業，子ども（女子のみ）には教育を提供するNGO（Dhaka市内にある，このNGOの織り物即売店）⇒【11】



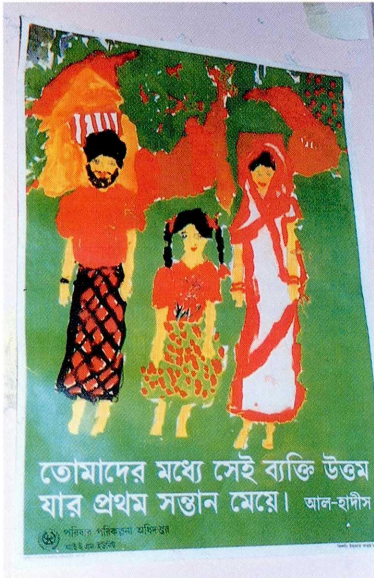
[写真9] 成人女子に対する識字教育が職業教育と平行してなされる（Dhaka）



[写真11] この女性は5人子どもを産んで，写真右下に寝ている末っ子は，生存している子どもの3番目である（Old Dhaka）



[写真12] バングラデシュの唯一の子ども病院で病気の子どもに付き添う母親



[写真13] 家族計画の必要性を呼びかけるポスター。

[写真17] 水で流せる設備があるトイレは良い方。ダッカ市内の小学校で



[写真14] 家族計画フィールドワーカーの養成風景。男性は少数派である

[写真15] 台所に貯めておく水を汲みに来た少女。水汲みは子どもがよくやる仕事



[写真16] 農村部の平均的な台所。写真左上に、燃料の薪が積んであるのが見える

